

方言手ぬぐい・方言のれん

(全国方言散歩：「国民百科事典」月報 1-14 平凡社 昭和 51 年 10 月~53 年 11 月)

観光地でみやげ物屋をひやかしていると、方言手ぬぐいや方言のれんをよく見かける。たいていは相撲の番付表の形を利用した方言一覧表であることが多い。

全国各地にあつて、わたしの手もとにも 100 本を超える手ぬぐいが集まっている。最近手ぬぐいよりものれんの方が多くなってきた。のれんならば、掛けて楽しめるし、売るほうもいい値をつけることができるからであろう。おもしろいことに、のれんになると、番付表でなくなるが多い。形態が変わると形式も変わるものらしい。

そのほか、ふろしきにしたもの、和紙など紙に印刷したもの、ミニチュアの番傘に刷り込んだもの、円筒形の木製貯金箱や湯飲み茶碗に書き込んだものなどいろいろである。

製作者や考案者を明記しないものが多いのも特徴である。観光みやげとして売るために作ったものが多いからであろう。観光協会や民宿協会や料亭の名をいれた宣伝用のもの、商工館や公民館が何かの記念に出したのものもある。特殊なものに、郷土方言保存会による研究と趣味の産物もあり、さらに、個人が遊び半分に作って知人に分ける場合もあるが、これら製作者の名の入ったものは、すべて手ぬぐいである。のれんならば、ただ方言を並べればいいけれども、番付表の手ぬぐいになれば、どのことばを横綱にするか、多少製作者の考えを反映させることになるからであろう。

方言手ぬぐいや方言のれんは、全国各地の方言どころか、アイヌ語のものまで北海道で売っている。しかし、東京方言のものはないし、関東地方の方言のものもないようである。近畿地方にも見当たらない。ただし、京都だけは別で、ここには手ぬぐいものれんもある。方言手ぬぐいも方言のれんもない地域は、どうも方言意識の希薄なところのようである。

とりあげられる方言の地理的範囲は広狭さまざまである。＜東北地方＞といった地方のこともあれば、県、昔の国、郡、群島（たとえば奄美）、市、町、観光地（たとえば雲仙、花巻）のほか、山梨県奈良田のように、異色あるとりあげた方言が注目されている一集落のことさえある。

とりあげられる方言の種類は、地方地方で伝統的にきまっているようである。父や母などの親族名称、女・娘・美女などの女性関係のことば、人の性質を表すことば、あいさつことばなどが好んで採用される。製作者が変わっても、手ぬぐいでものれんでも、横綱になることばや大関相当のことばは一定している。た

たとえば、鹿児島方言のある方言のれん（珍しく番付表になっている）と方言手ぬぐい（珍しく一覧表になっている）を比べてみると、どちらにも<オゴジョ（娘）><ヨカニセ（いい青年）><オヤットサー（ご苦労さま）>などがあり、驚くことに、18語のうち一語を除いて全部一致する。くいちがう一語も、一方が<ウゼラシ>、一方が<セカラシ>で、意味はどちらも<うるさい>である。

このように、とりあげられる方言の種類が一定しているのは、よく選び抜かれた方言ばかりのためなのか、それとも、方言を新しく掘り起こすような研究を怠っているためなのか、それはよくわからない。

（柴田 武著）